

ART KISS LEITER

FOR KUMAMOTO ART PEOPLE Contemporary Art Museum, Kumamoto

熊本市現代美術館発行 <http://www.camk.or.jp> [2008.秋号] **vol.39**



メモリア —まなざしの軌跡

「記憶」や「体験」をテーマに、9人の現代美術作品や1935年に熊本市で開催された新興熊本大博覧会を紹介する展覧会です。写真の須田悦弘さんは、木彫彩色の肥後朝顔、肥後巧庵の新作を展示しています。また500kgの砂をつかった作品は期間限定。展覧会が終わると形も失われ、元の砂に戻りますので、ぜひ10月19日までにご覧ください。

「河原町アートの日」協働イベント：梅田哲也ライブ「かわらまち」 2008.6.8

「ピクニックあるいは回遊」展出展作家の一人、梅田哲也さんが河原町周屋街通路でライブパフォーマンスを行いました。お客さんが駆けつけました。現象としての音を扱う梅田さん。身近にあるさまざまなものから装置を作ります。今回用意されたのは、お米、ドライアイス、クリップ、鉄パイプや木棒、アルミ鍋、ポウル、梅田さんお手製のアルミの容器、てくすやピアノ線等々。梅田さんの手にかかると、さまざまなものから思ってもみない音が生まれては消え、ライブならではの緊張感と躍動感が会場を包みます。ライブ終了後、雨音や金属のささいな音など、普段気にもしないような物音に思わず耳を傾けてしまう、会場にはそんな余韻が残っていたのでした。(M.O)



横山裕一著書『ニュー土木』音読パフォーマンス 2008.6.14

マンガ家の横山裕一さんによる著書『ニュー土木』音読パフォーマンスを開催しました。横山さんのマンガは、ナレーションや舞台設定がマンガに明記されません。「いつ」「どこ」「だれ」は全てあいまいなのですが、男の集団が濁々とひとつの目的に向かって移動・行動している、というのがすべての横山さんのマンガにおける共通項となります。「ピクニックあるいは回遊」展においては、横山さんのマンガ「山頂」(3ページ)をこの展覧会のために描きおろしていただき、それをポスター、チラシ、パンナー、カタログなど、広報物に使用しました。会場内には拡大して巨大パネル化し、原画とあわせて展示しました。前日に、篤鳥書店熊本三年坂にて、トーク&サイン会を開催したこともあってか、ホームギャラリーは横山さんのマンガを持参されたファンの方々も含め、60名以上の方にお集りいただきました。イベントで音読したのは『ニュー土木』より『土木』、『トラベル』を最初から2/3の分量まで、各コマの表現のディスクリプションが行われました。また、作品(わたしたち)の解説など、内容盛りだくさんで行われました。また、横山さんご厚意により、参加者全員に、原画のプレゼントサービスがあり(これはサプライズでした)、著書へのサインなども快く応じてくださいました。ちなみに横山さん、かつて好んだマンガとしては「マカロニほうれん荘」「天オバカボン」「ビー・バップ・ハイスクール」を挙げられていました。コマの疾走感と、ストーリーにおける集団行動の多さにおいては、多少の影響が感じられますね。(H.T)



プレママ美術ツアー 2008.6.28

美術館内で、ちいさなお子様と楽しくゆっくり過ごせることをご紹介するプレママツアーを開催しました。このツアーは、当館内のフリーゾーン(無料で入れるゾーンです)には、キッズサロン(木のボールのプールで有名です)や授乳室など、便利な施設があることをご紹介する内容です。展覧会も、大人から子供まで楽しめる内容ですので、学芸員の案内のもとで、参加者のみなさんにご見学していただきました。(H.T)

ゆかた祭参加しました／肥後花灯籠ワークショップを開催しました 2008.7.19-20

中心商店街等連合協議会が毎年開催している「第4回城下町くまもとゆかた祭」に、今年も参加しました。7月19日、20日の2日間、ゆかたを着てこられた方には展覧会を半額で観られる等、様々なサービスを実施しました。昨年に引き続き、ちょうど展覧会のオープニングと重なったこともあり、ドイツや中国のアーティストにもゆかたを着てアーティスト・トークをしていただきました。また、今年7月12日、13日の2日間、「ゆかた祭」に先駆けて、「肥後花灯籠」のワークショップをキッズファクトリーにて開催しました。これは、京都で10年ほど行われている「愛宕古道街通灯し」というお祭りにヒントを得たもので、京都嵯峨芸術大学と熊本のデザイナーとの協働事業として実施しました。市民の皆さんに、竹と和紙を使って花灯籠を作っていただき、その灯籠で「ゆかた祭」の会場である中心商店街を彩ろう、というもの。初めての試みでいろいろな試行錯誤はありましたが、夕暮れの商店街を彩る「肥後花灯籠」は美しく、大変好評でした。美術館でのワークショップに参加してくれたご家族が、商店街をゆかたでそぞろ歩いていたのがとても印象的でした。これからも、美術館の事業が、中心商店街と市民の皆さんなど、誰かと誰かを繋ぎきつかけのひとつになれば、と思っています。(C.I)



GIII vol.56 映画看板師～田上賢二展 2008.7.16-8.31

今なお熊本で映画看板を描き続けている映画看板師田上賢二の展覧会が開催。「エデンの東」や「第3の男」といった不朽の名作から、「ラストサムライ」や「武士の一分」といった話題作23点が並び、訪れた人々の記憶を呼び覚ます空間となりました。会期中の7月21日には、当館名物企画「月曜ロードショー」の看板制作の実演も行われ、100人を超えるお客さんは徐々に描きあげられていくクリント・イーストウッドに感嘆の声を上げていました。「懐かしく見させてもらいました。ありがとうございました。当時の映画館の前に立っているような気持ちにさせていただきました」(90代男性、アンケートより)(E.Z)



ワークショップ「陶板で絵日記つくろ」 2008.7.26/8.2/8.9

夏休みのイベントとして 7/26(土)・8/2(土)・8/9(土)の3回に亘り、陶芸用のペンや絵具を使って絵日記のプレート(陶板)をつくりました。始めは考えがまとまらずどうしよう・・・と悩む姿も見られましたがさすがは子どもたち！決まってしまうと真剣そのもの一直線！滑らかな陶板の表面に、楽しい夏休みの思い出や挑戦したいことを夢いっぱい描きました。焼き上がりの作品を見て目を輝かせる子どもたち。夏の思い出がたくさんつまった作品になりました。(C.T)
※作品は8/9～8/23までホームギャラリーに展示しました。



SAP協働イベント：バッハメモリアルコンサート 2008.7.28

ホームギャラリーにて、ストリートアートブックス恒例「バッハメモリアルコンサート」を開催しました。これは偉大な音楽家の命日にその人物と音楽を楽しんでもらおうというイベントで、7月28日はバッハの命日にちなんで「アヴェ・マリア」「G線上のアリア」などの名曲が11組によって演奏されました。200人を超える観客で会場は満席！バッハその人物と音楽を心ゆくまで堪能できるイベントとなりました。(M.O)



日本画ワークショップ 2008.8.10

「メモリアーまなざしの軌跡」展出品作家の千々岩修さんを講師に迎え、日本画ワークショップを開催しました。岩絵具、和紙、箔など制作時に使用する材料や、技法など様々なお話を交えながら、千々岩さんが提供して下さったひまわりの花を描きました。水彩絵具とは一味も二味も違う岩絵具で日本画に挑戦する参加者のみなさん。試行錯誤しながら、夏の風景に似合う、表情豊かなひまわりの作品が完成しました。(M.O)



Visitor's Letter

来館者のみなさんからのメッセージアンケートに寄せられた感想(抜粋)を紹介いたします。

◇ピクニックあるいは回遊展

- ・純粋な楽しみ、懐かしさを覚えました。特によかったのは、「自分が作品を構成する要素だ」と感じさせること。例えば、空間の中に観る側を取り入れるような展示室。(26歳、女性、熊本市内)
- ・最後の鑑の部屋(倉山裕昭さんの作品)が素敵でした。私は美術館でも、観るだけでなく触ったり体感できるものが好きなので、とても楽しむことが出来ました。(21歳、女性、熊本市内)
- ・若い人の作品を中心に展示だったので新鮮な感じがありました。またこのような企画で展覧会があるというのではないのでしょうか。いつも通り期待を裏切らない展覧会でした。(34歳、男性、熊本市内)
- ・自分の研究している生物が展示されていたので来たのですが、とても良い経験となりました。(17歳、女性、熊本県)
- ・大きな虫、ふしぎな世界、見なれた風景、いろんなところに行った気分です。意外と近くにステキなものがあるんだなあ。(30歳、女性、熊本県)
- ・おもしろいところみであり新鮮。くまむしの巨大な姿に感動。(62歳、男性、熊本市内)
- ・トライアル感が強く好感をもてた。しかし完成度が高いとはいえない。情熱的な作品が欲しかった。(31歳、男性、大阪府)

◇メモリアーまなざしの軌跡展

- ・今、自分がここにいる事は何故、何兆の偶然が重なってできた一つの未来なんだと思った。パンフレット(作品や作者についての紙)があったので、分かりやすかったです。(14歳、女性、熊本県)
- ・作品等はとても見ごたえがあって大変良かったです。たまたま良かったので、もっと作品を見たかったなあと思いました。(22歳、女性、熊本県)
- ・インスタレーションの作品がとても面白かったです。特に須田さんの「雑草」は見つける楽しさと、見つけた時の喜びがありました。(21歳、女性、熊本県)
- ・とてもユニークな企画展でした。昔の博覧会の記憶とその後の作品との連動がちよっとムリがあると思います。(45歳、男性、東京都)
- ・一つ一つの展示に空間的な余裕があって、次の展示品を見るまでに頭を切替えられた。(26歳、女性、東京都)

◇田上賢二展

- ・大好きな「風と共に去りぬ」の看板を見ることが出来、本当に嬉しかったです。(29歳、女性、熊本市内)
- ・玉名市内に住んでいるので、今回の「田上賢二展」は身近に感じ、とても良かったです。洋・邦画の映画の看板がすごくステキにえがかれていて感動しました。(46歳、女性、熊本県)
- ・映画が大好きなので、田上賢二さんの看板展に出会えてとてもうれしかったです。(45歳、男性、奈良県)

◇館全体について

- ・こんなに気軽に入れる美術館、しかも無料とは、本当に熊本って街はスゴいなど感動しています。またきつと来ます。(29歳、女性、熊本市内)
- ・もっと広く県民に知らせるべきだと思います。ほとんど知らない人が多いのに、こんなにステキな場所もっていないと思います。(54歳、女性、熊本市内)
- ・卓球のラケットとピンポン交換してほしい。カンパ箱を置いてくれたらお金入れて帰ったのと思いました。壊れかけているけれど楽しめました。(45歳、男性、奈良県)
- ・タレルや宮島さんなど見れてうれしかったです。(49歳、女性、東京都)
- ・街に来る度寄っていきます。最高に素晴らしいです。特に今日はゆかた姿の美しい女性の方に夏の暑さもふっ飛びました。(65歳、女性、熊本市内)
- ・タレルの図書館すばらしい！！東京にもあったらなー。タレル、宮島さんらの作品を無料でしかも近くで見られるなんてすばらしいです。(48歳、女性、東京都)
- ・いつも子供のコーナー(キッズサロン)の「子ども昔話」の視聴ばかりです。(51歳、女性、熊本市内)

松岡涼子舞踏「ほころび」 2008.6.22

展示会場内、富永剛くんとぜんなかー There's nothing to do.」の作品前にて、松岡涼子さんの舞踏「ほころび」が行われました。午後5時から、しかも展示会場内ということで、集客にはちょっと不安もあったのですが、時間が近づくにつれ、舞踏目当てのお客様がぞくぞくと集まりはじめ、むしろ「皆さんよく見えるかしら？」と心配するほどの混みようとなりました。

白い壁側に、富永さんの故郷玉名の景色がスクリーニングされるなか、白い衣装を着た松岡さんが麦わら帽をもってゆっくりゆっくり登場。床に置かれた長い竹を帽子とひきかえに受け取り、壁の後ろ側に進みます。壁の後ろ側、土壁側で、松岡さんがゆっくりと竹とたわむれ、最後に竹をたてかけ、退場。

松岡さんの舞踏によって、大きな土壁が持つ自然の空気が倍増され、その空間が、ひとと自然の近さをじんわり感じさせるような、幼少期に自然のなかで無我夢中で遊んだ感覚を思い出させるような、静かでやわらかな雰囲気漂っていました。1時間の公演でしたが、みな時間がたつのを一時忘れていたような気持ちになりました。(H.T)



鈴木淳「花畑公園で会いましょう」 2008.6.29

土砂降りだった朝の雨がきれいにあがった午後、「ピクニックあるいは回遊」展の出品作家である鈴木淳さんの5つめのイベントが始まりました。内容は2人1組で作家の作成した電車に乗り、花畑公園に写真撮影に行くというものです。気になる電車は何と、か弱い1本の糸でした！傍からは見えないほどの細い糸だったため、何の違和感もなく街中を電車ごっこしながら通ることができました。「見えないけど繋がっているんです」とほつりと鈴木さん。花畑公園に着くと、昔の写真と今を見比べながら1組ずつカメラでパシャリ。今回は人と人との繋がりを実際に肌で感じつつ楽しめる会となりました。撮影された写真は展示会場に展示されました。(C.T)



鈴木淳 アーティスト・トーク 2008.7.5

会期中めくるめく開催された鈴木淳さんのイベントを出品作家鈴木淳本人が総括する会を現代美術館のホームギャラリーで行いました。集めるつもりがなくても不思議と貯まっていった熊本城の絵葉書を作品にしたお話や、「似顔絵」ではなく「似木絵」になった理由、作品をつくる際の「これだ！」と思う瞬間などたくさんのお話をさせていただきました。みなさんの質問に答えながら時にきらりとユーモアをみせる鈴木さんのトークは笑いが絶えず、会場は和やかなムードで包まれていました。トークの終わりには特別企画で巡礼ツアーを行いました。ピクニックあるいは回遊展をきっかけに鈴木ファンとなった方から今日たまたま美術館に来られた方までみなさんにここにこと笑顔で参加されていました。不思議と鈴木さんの周りには笑顔が集まります。そういえば鈴木さんの行ったイベントはどんなに悪天候でも晴れたのでした。ツアーの帰りには上通り商店街の御協力の元に設置してある作品たち「そこにそこ」を見ながら歩きました。日常の中にちょっとおかしな空間を演出した作品にまた笑みが漏れます。お店の店長さんも「あ、鈴木さんだ」と私達を明るく出迎えてくれました。熊本という土地の時の流れや人とのつながりを教えてくれるイベントを提供して頂いた鈴木さん。ありがとうございました。(C.T)



田尻幸子ミニトーク&ワークショップ「おうちにつれてって」 2008.7.6

ピクニックあるいは回遊展最終日の夕方。田尻幸子さんによる「おうちにつれてって」ワークショップが開催されました！このイベントは、館内エレベーターに展示されている田尻さんの作品、「ひかりのつぶ」を参加者のみなさんにおすそわけをし、後日美術館宛てに自宅などに飾った写真を送って頂くというもの。会場にはたくさんのお客さんが駆けつけ収穫祭のような賑わいでした。(M.O)

*送って頂いた画像は、美術館ホームページのブログにてご紹介しております。また、美術館の階段ギャラリーに展示しました。



メモリアーまなざしの軌跡展 アーティスト・トーク 2008.7.19-20

メモリアー展出品作家のアーティストトークを行いました。

・香港のアーティスト、アナザーマウンテンマンさんは、《ランウェイ》シリーズについてお話くださいました。CMやポスターなどのデザインを広く手掛けていますが、日本で現代美術の作品を展示するのは今回が初めてです。中国広州を撮影した6点のほか、最新作のバンコク、台北と、インクジェットプリントによる写真作品12点を展示しています。

・ケルン在住のカンティダ・ヘーファーさんは、自作の図書館シリーズを中心にお話くださいました。今回は5点の大作、9点の小～中型の作品を展示しています。

・台湾のアーティスト、チェン・ジエレンさんによる《ファクトリー》(2003)はサイレントの映像ですが、その沈黙によってのみ語られることがあるとお話くださいました。

・ベルリン在住のピーター・ローゼルさんは、ドイツ警察の制服を使った睡蓮の池、そして砂漠の盛気楼を描いた絵画についてお話くださいました。

・ベルリン在住のイヴォンヌ・リー・シュルツさんの作品は、赤い壁とシャンテリアのシルエットをかたどった鏡の迷宮のような空間が魅力的です。

・熊本市出身の千々岩修さんは自然から感じられる強さやひたむきさを大事に制作されています。今回は色彩豊かな日本画の作品に加え、新しい取組みである墨を使った作品も展示しています。これについては感情を無にして描かれたとか。その中にも自然の要素や動きを感じる新鮮な作品を展示しています。

・須田悦弘さんは本展のために、肥後朝顔と肥後芍薬の2点の新作を制作してくださいました。

・マリエツラ・モスラーさんの作品は砂でできています。部屋一面に広がる砂の上に、砂で描かれた曲線の連なり。少しずつ少しずつ砂を積み上げて作られました。作品のタイトルは「無題」。砂の線による図形が何を表わしているかは、見ている人の想像にゆだねられているそうです。トークでは「装飾」というテーマについてのお話などもありました。この作品は最後には跡形もなく消えてしまいます。見たものの記憶のなかにのみ存在し続ける作品なのです。

(Y.H) (M.F) (C.T) (M.O)



CAMKレクチャーカレッジ 2008.7.27

「メモリアー記憶とミュージアム」と題して、本田代志子(当館主任学芸員)が、展示会の概要や作家のこれまでの作品の紹介を行いました。

ファミリー・ツアー 2008.7.26

メモリアー展のファミリー・ツアーには、2組のご家族に参加していただきました。比較的年齢も高めだったせいか、落ち着いて鑑賞できました。中でも新たな発見だったのは、チェンさんのサイレントの映像作品「ファクトリー」を4歳の男の子が夢中になってみていたこと。力のある作品は、年を問わず引き付ける力を持っているんだな、と感心しました。(A.S)

ART de Gyan!

【アート・ド・キャン】
熊本で「アート、どう？」の展です。

今回は、学芸員実習生の皆さんにも、ギャラリー取材にトライしていただきました。執筆者は以下のとおりです。
*敬称略、50音順。ギャラリー取材原稿の文末にイニシャルにて記載。
麻生知洋(K.A)、浦上美智子(M.U)、江形幸恵(Y.E)、島田万葉(M.S)、末松美沙子(M.Su)、杉原明日香(A.Su)、桂子田堂(A.Ta)、西嶋忍二(S.Ni)、野辺咲子(S.No)、原田睦(M.H)、東ゆかり(Y.H)、前田夏美(N.M)、吉田登衣加(A.To)

ある種の青：大畑晶子展

2008.8.5-8.10 ギャラリーカフェ トト
熊本市上通町5-46上通イーストンビル3F TEL 096-352-7162

大畑晶子さんの初個展。本展は、ブループリントを中心に、ポラロイド、デジタルカメラの写真で構成されている。彼女の写真では、被写体となっている動物や植物が調和した、独特の世界観が表されている。さらに、ブループリントの作品では、感光剤にエタノールやアンモニアを加えることで、様々な青の表情を生み出すことに成功している。太陽の光で直接焼きつけるブループリントは、その瞬間の時間や天気、匂いまでもが記憶された作品となっている。ブループリントを応用した蓮のインスタレーションでは、巻きつけた糸に写真を焼き付けることで、糸の重なりと写真の重なりという多重性が生み出されていた。今後は、写真、映像、ドローイングなど様々な分野が横断した作品を制作したいとのこと。次の展覧会が楽しみだ。(A.A)



一夢庵風流窯・桜ころろ窯 二人展

2008.8.19-8.24 熊本県伝統工芸館
熊本市千葉城町3-35 TEL 096-324-4930

上村慶次郎さんと吉田智穂さんの二人展。戦国武将前田慶次郎の信念を貫く生き様に憧れ、作品を制作してきた上村さん。自らの窯の名もその人物が登場する小説から「一夢庵風流窯」とした。器と人形にこだわった存在感の強い作品を制作しており、「咆哮」もそんな作品のひとつだ。天に向かって声の限りに叫ぶ孫悟空の姿を模ったこの作品は、今にも咆哮が聞こえてきそうなほどである。
阿蘇市西小国で育った吉田さん。幼いころから桜に親しみ、自分も桜のようにみんなに愛されるよう作品を作っていきたいという思いから「桜ころろ窯」という窯の名にしたという。今回は夏をテーマに、家族で囲んで和むような皿や器などを制作。中でも、白を基調とした中に桜を描いた小皿、碗そして湯呑のセットは涼しさを感じさせる、女性らしく、可愛で親しみやすい作品だった。(Y.E/N.M)



想愛恋

2008.8.19-8.24 熊本県伝統工芸館
熊本市千葉城町3-35 TEL 096-324-4930

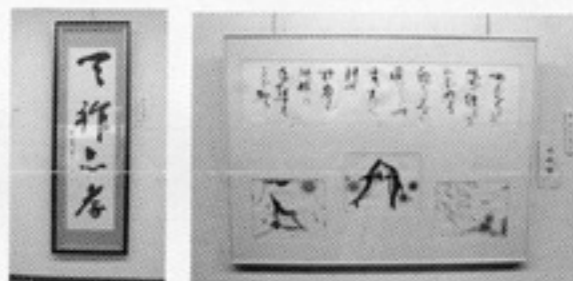
花の汁で染めた和紙に、恋の詩を書く國春在良一(須藤良一)さんの個展。和紙や染める花によって染まり方や色の出方が異なり、洗いや緑、淡い赤、白濁した黄など、自然で落ち着いた色合いが印象的だ。
当初は、詩の載った和紙を額に入れるだけだったらしい。しかし、その詩を書いた和紙が沢山になったので「もったいない」と、竹籠にその和紙を干切って張り、篆刻の石でその表面をなで、仕上げに柿の渋汁を塗って暗めにコーティングした。また、仕上げに亜麻の花油を用いると元の花の色が残っており、それもまた一興である。
籠の裏側には、「すごく寒いから 寒いから ねえ抱いて 恋」と恋心が隠れている。國春在良一さんが大切に書き溜めた想いを、「籠」という別の形で再利用できるのも、繊維の多い「和紙」ならではのなせる業である。花で染められた淡い和紙の合間から、ちらりと覗く恋の詩が、一つの籠に優しく詰められている心温まる作品達であった。(M.Su)



第38回同光會書展

2008.8.19-8.24 熊本県美術館分館
熊本市千葉城町2-18 TEL 351-8411

福岡教育大学書道科OB熊本県人会主催の書展。20代から70代まで幅広い年代の作品が展示されている。
與田美枝子さんの《天祐忠孝》という作品は、大きく天祐忠孝と書かれている。太く力強い線の中に優しさや暖さを感じられる作品だった。與田さんは右利きだが、そっちの方がより線のおもしろみが出るということで、この作品はわざと左手で書いたのだという。紫垣久美子さんの作品《水族館》は、上半分に水族館をテーマにした詩、下半分に水族館の魚たちを描いた水墨画、という構成だ。詩や絵の内容を楽しむだけでなく、水墨画に使われている複数の墨がおりなす色味の違いも楽しむことができる作品となっている。今回の書展は全員自由な作品に取り組んだということもあり、それぞれが独自の持ち味を持ったおもしろい作品となっていると感じた。(M.H)



ふくしま さくら展

2008.6.24-6.29 ギャラリーカフェトト
熊本市上通町5-46上通イーストンビル3F TEL 096-352-7162

熊本県出身の作家ふくしまさくらさんの個展。女心の切なさや悲しさを優しく落ち着いた色で表現した油絵が13点展示されており、多くの作品には悲しく切ないタイトルがつけられていた。
特に印象に残った作品は《また同じ朝がきても嫌ではないのにまた同じ夜がくるのはとても苦しい》。この作品は、大きなベッドの端に悲しい顔をした一人の女性が小さくなって横になっている様子が描かれている。その女性の背中には寂しさを象徴する一匹のウサギが寄り添っている様子がほんやりと描かれており、切なさを一層増している。夜は寂しくなるという切ない女心に共感できる作品である。ふくしまさんの絵は、影が多く使われたり、人の形をぼやかしたりなど、見る人の状況によって見方が変わってくる幻想さも持ちあわせていた。展覧会場は暖かい雰囲気、訪れた人のコメントノートには「癒された」の文字が多く見られた。これからも、人々の心を支え、離さない絵を描き続けて欲しい。まだ、大学3年生。これからの活躍が楽しみだ。(A.Ta/A.Su)



白州会展

2008.8.19-8.25 くまもと阪神
熊本市桜町3-22 TEL 096-322-1111

九州在住の白日会会員七名(白州会)によるグループ展。白日会は主に具象表現を目指す団体であるが今回は七名それぞれの個性を堪能することができる。長田ユミさんの作品には油絵具の透明感を活かしたオーソドックスな描き方のものが多く、描かれる女性や静物は静かな雰囲気をもっと魅力的であった。長田さんは仕事をしながら制作活動を続けられており、多忙な中で描き続ける熱意が作品を通して伝わってきた。また、具象絵画といってもタッチが繊細なものと勢いのあるものがあり、その個性が興味深かった。一方で有田巧さんの作品は半抽象的なものが多く展示されていた。小さな家やビン、お皿が並んだ不思議な丸テーブルを子どもが覗き込んでいたり、明快な色と線で構成された作品はユーモアと洒落っ気のある楽しい作品であった。他にも飽きない作品ばかりで、作家それぞれが「モノに対峙する時間」を大切にしていることが感じられる展覧会であった。今回が白州会としては初めての展示会ということで、今後の活躍が楽しみである。(S.No/M.U)



東弘治「旅のはじまり 国境そして靴」

2008.8.21-8.31 島田美術館

熊本市島崎4-5-28 TEL 096-352-4597

東弘治さんの版画を中心とした作品の個展。廃墟を主に描いたものや4文字熟語のような言葉からイメージするものを描いた版画などが展示されている。廃墟や荒れた家屋、版画ゆえの白黒という色から感じる寂しいイメージとは裏腹に、東弘治さんは廃墟がある風景をよい雰囲気として描いている。以前白川沿いに人が住む粗末な小屋などが多く有り、そのかつての風景を気に入っているという。東弘治さんは自分の作品に対して、「廃墟の入り口でたたく姿や、変わりゆく故郷を前にたたく後姿が登場するようになりました。しかしそれは現実を見つめながらも先ず一歩歩みだすための準備のときでもあります。」と述べている。「観る人に楽しんでもらいたい」という東弘治さんの言葉どおり、4文字熟語からの作品では、写真の「悪戦苦闘」のように笑みがこぼれるような遊び心に富んだ作品が多く、何度も東弘治さんのユーモアさを感じることができる作品展である。(K.A)



コドモ≦ □ ≦オトナ 女の子6人によるグループ展

2008.8.19-8.31 崇城大学ギャラリー

熊本市花畑10-25 TEL323-1158

洋画・日本画・彫刻・グラフィックデザインを学ぶ、有志の女子学生6人によるグループ展。成人式を終えたばかりの子供以上・大人未満の「女の子」である彼女たちが、今の自分たちを14点の作品により表現した。稲葉未来さん(日本画)の《ナガレ》は、将来に対する不安を、少女を取り巻く流れによって表現。褐色の肌の少女と淡い赤と象牙色の流れが独特の雰囲気を持つ。今村昌代さん(グラフィックデザイン)の《色採集》は、雑誌からコラージュし色ごとに枠組みした作品。女の子の憧れが、色彩鮮やかにストレートに形になり、惹きつけられる。製作者の自己紹介を兼ねた「女の子診断」では、来場者が製作者6人のどの性格に当てはまるかを、YES・NOで判定できる。遊び心と、自分より大きな作品を造り上げるパワフルな女の子力が詰まったグループ展だった。(A.To/Y.Hi)



Kei 作陶展

2008.8.19-8.24 熊本伝統工芸館

熊本市千葉城町3-35 TEL 096-324-4930

「作品に触れられる方の自由な感覚で楽しんでもらえたら」と語る、Keiこと秋山圭さんによる作陶展。器約100点、オブジェ約100点が並んだ会場は、落ち着いた白色の展示台に素朴な土色の作品で統一され、全体にはすっきりとした、しかしながら温かみのある空間をつくっていた。器のシリーズでは、くっきりとした線で動物の図柄が描かれている。一方オブジェのシリーズでは、犬、猫、ブタ、鹿、カエル など、ひょうきんな顔立ちをした動物たちが勢ぞろい。赤茶色を基調に薄く釉薬を塗られた体は手の平サイズで、心持ち軽い。また、この展示では、布や竹細工の小物を使って動物達の周囲の風景をさりげなく演出していた。秋山さんは98年の初個展以来、福岡を中心に展示を行っている。熊本での展示は2回目、今年の10月は阿蘇郡高森町でのグループ展に出品予定だ。取材中も、会場前で来館者が足をとめていく。その顔は、一様に和やかな笑顔に満ちていた。秋山さんの意図が、訪れる人に自然と伝わっているのを感じた。(M.S)



第23回いずみ南絵画クラブ作品展

2008.8.21-8.30 画廊喫茶ジェイ

熊本市大江本町6-9(味噌天神電停前) TEL 096-372-8732

「いずみ南絵画クラブ」とは、出水南中学校の父兄の方と元出水南中学校の美術教諭の田代晃三先生からなる絵画クラブで今回で23回目の展覧会になる。活動内容は一カ月に一度喫茶ジェイに集まり、自宅で制作した作品を田代先生に講評していただき、今後の制作活動に活かしていくものだ。出品者の小松千和子さんに作品について伺ったところ、小松さんの作品は知り合いからもらった玉ねぎがモチーフとして魅力を感じて制作したとのこと。作品は新聞紙の上に玉ねぎが15個ほど置いてあるもので、玉ねぎの1つ1つの違った形が生き生きと絵描き出されていた。他にも、喫茶ジェイのママである永田順子さんの作品で秋に枯れたアジサイを描いたものがあり、版画だと思っていたが実は版画ではなく技法は企業秘密とのこと。秘密と言われると無性に気になる一枚である。

喫茶ジェイはノスタルジックな昭和を感じさせる雰囲気の良い空間で、昭和を生きた作家の作品が喫茶ジェイの雰囲気とマッチして空間的に良いものを感じた。(S.Ni)



第36回硯心展

2008.8.20-8.25 アートスペース大宝堂

熊本市上通5-6 TEL 096-354-2155

熊本大学書道部の卒業生でつくる硯心会員45人の書展である。自分の好みで選んだ詩や言葉を題材にして書で表現していた。各自でコメントを添えて、ユニークで多彩な会場となっていた。

上田桂峯会長は「日新無窮」と自然体で示している。柏原御雲さんは唐・劉長卿(りゅうちょうけい)の詩を中林梧竹(なかばやし・ごちく)の書風で書き、鋭い線がきいていた。徳永果鶴さんは「春雪満空来…」を確かな長峰の筆使いで潤滑もあり変化に富む作である。森山淡草さんは、正法眼蔵と弟子の三聖慧然とのやりとりを、「眼蔵」と大書した金文に添えており、調和体として見せて、ユニークな作である。三嶋天鴻さんは「老 伏?志在千里」と書き、コメントに「氣力に満ちておればいつまでも若々しくしておられるでしょう。書を楽しみ、書の高みを目ざしたいと思う。」とある通りで、自在な用筆と自由な発想で書いていた。徳田翠雨さんは達磨さんを中央に大きく描き、まわりに「立って半畳、寝て一畳、天下取っても二合半」と自己流の書で気取らずに書いて面白い。緒方龍生さんは「鉄心石關」を扁額に書き、直線を強調した筆使いで曲線との組み合わせもうまく構成した。(S.K)



鹿島美術財団の「美術に関する調査研究助成」を受けて、5月末から10日間、ニューヨークに調査に行かせていただいた。今回の調査では、ニューヨーク近代美術館(MOMA)のアーカイブと図書館を中心に、ホイットニー美術館付属図書館、アメリカ美術アーカイブのニューヨーク支所などでマーク・ロスコをはじめとする抽象表現主義の展覧会資料について調べた。

MOMAアーカイブでは、MOMAで開催された展覧会ごとにファイリングされており、作家とキュレーターとの間で交わされた手紙、展示プラン図面の下絵、キュレーター同士の些細なメモの遺り取りから、カタログの論文下書きまでが詳細に保存されている。これらの資料から、ロスコの作品展示位置へのこだわりや作品同士の関連性、ビッグネームの評論家が美術雑誌で批評を担当する時期に合わせて展覧会を開催するように要請していたロスコの戦略的側面などがみえた。また、展覧会カタログの論文の下書きからは、抽象表現主義の展覧会をヨーロッパに巡回させるにあたって、アメリカ美術の独自性と国際性を強調するために、キュレーターたちが心を砕いていたことがうかがえた。滞在中は、ほぼ毎日MOMAアーカイブに通ったが、同じく調査に訪れていた研究者たちもアメリカ各地から長期滞在でリサーチに来ていたようで、毎日顔を合わせることになり、不思議な一体感が生まれていた。

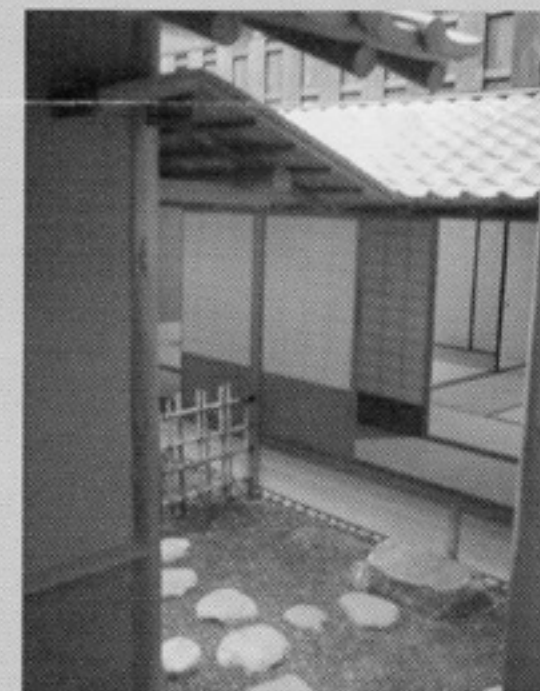
この時期に調査に赴いた理由の一つは、ジュエイツシュ・ミュージアムで開催されている抽象表現主義の大々的な展覧会「Action/Abstraction: Pollock, de Kooning, and American Art, 1940-1976」の視察である。抽象表現主義の特徴の一つに、評論家たちが、抽象表現主義の作品がその様式において西洋美術史における正当な継承者であると同時に、ヨーロッパの模倣ではないアメリカ固有の美術を確立したと紹介し、理論づけたことで、アメリカが「世界のアートシーンの中心地」となる一翼を担ったことが挙げられる。本展では、特に抽象表現主義の画家たちと深い関わりがあったクレメント・グリーンバーグ、ハロルド・ローゼンバーグの二大評論家に焦点をあて、抽象表現主義を読み解くという意欲的な展覧会であった。加えて、抽象表現主義の運動が終息していくなかで、二人の批評がどのように展開していくのかを辿っていたことも面白かった。彼ら2人がユダヤ人であり、抽象表現主義の作家の多くがユダヤ人であったことが、ジュエイツシュ・

ミュージアムでの開催につながったことは言うまでもない。展覧会では、二人の評論家と作家たちとの間で交わされた文書や、彼らの論評を紹介するコーナーが設けられ、それを囲むように抽象表現主義の作家たちの作品が網羅的に展示されていた。タイトルには出ていないものの、プレスリリースを読む限りではこの展覧会は、この2人の評論家と抽象表現主義の作家たちとの物語なのである。であれば、作家の点数を絞りこむなどして、もう少し具体的な作品とテキストを並置させ、作品と批評の関連性を掘り下げて追究したほうが良かったように思う。テーマがユニークであるにもかかわらず、浅く広い印象を与えてしまったのが少し残念であった。

滞在中、晩年ロスコがスタジオとして使用し、現在は裏千家のニューヨークセンターとして使用されている建物を見学した。建物の内部全体は大きなスタジオで、そこに裏千家が京都から移築した立派な茶室3つと庭がしつらえられた、興味深い空間となっている。天井は予想以上に高く、屋根裏に上がらせてもらうと天窓からの光の入り具合が良くわかる。ロスコが作品制作をしていた際の自然光や照明の使い方については、様々なエピソードがあるものの、彼の表現において光が重要な役割を果たしていたことは言うまでもない。センターを管理する事務局の倉島さんによれば、天窓から入る光が一番強い時間は朝であるという。この事実は、ロスコが午前中に作品を制作し、午後は制作をしなかった大きな理由といえるだろう。ちなみに、この裏千家ニューヨークセンターは、関係者ならびにそこで茶道を学んでいる生徒にのみ開放されており、通常は一般の人には開かれていない。今回は、ロスコの調査の主旨をご理解いただき、特別に開放していただいた。ここに感謝の意を記したい。

なお、今回の調査は、報告論文として『鹿島美術研究』に掲載予定である。

写真:ロスコのスタジオ(現 裏千家ニューヨークセンター)



お知らせ

「第20回熊本市市民美術展 熊本アートバレード」
応募要項の配布を始めました！
テーマ：
「すっごい正直(でなければ、すっごいウソ)」

今回の審査員は、国内外で活躍されている会田誠さんです。会田さんより、メッセージもいただいています。応募要項やポスターに掲載していますので、どうぞご覧下さい。たくさんのご応募お待ちしております。(展覧会期：2009年2月28日(土)～3月15日(日)) (N.I)



編集後記

今号は、学芸員実習生のみなさんに、熊本市内のギャラリーで行われている展覧会取材するアートドギャンの記事作成に挑戦してもらいました。実習生による取材・執筆は夏のAKLの恒例となっております。熊本市市民美術展の募集要項配布もはじまりました。今回の審査員は会田誠さんです。テーマやテーマへのメッセージすべてに、会田さんご自身のアートに対する深い思いが感じられます。熊本市在住・出身・勤務・在学いずれかに該当する皆様に、無料・無審査でご自身の制作された作品を出品していただくのが、熊本市市民美術展熊本アートバレードです。皆様の力作をお待ちしております。(詳しい概要につきましては配布中の応募要項をご覧ください)

編集長 富澤治子

今回は梅雨時期から残暑までのさまざまな夏のイベントをお届けしました。講演会からワークショップ、ミュージック・ウェブ、フィルム上映、看板公開制作など、さまざまなアーティストと多くのお客さんと共に駆けつけた暑い夏でした。

担当 大岩みゆき

●執筆者一覧 *ギャラリー取材原稿の文末にイニシャルにて記載しております。

兼城昌山
Syozan Kaneshiro (書道家)
森山淡草
Tanso Moriyama (書道家)
本田代志子
Yoshiko Honda (熊本市現代美術館主任学芸員)
龍座江美
Emi Zoza (熊本市現代美術館学芸員)
富澤治子
Haruko Tomisawa (熊本市現代美術館学芸員)

坂本顯子
Akiko Sakamoto (熊本市現代美術館学芸員)
芦田彩葵
Aki Ashida (熊本市現代美術館学芸員)
伊豆菜々
Nana Izu (熊本市現代美術館学芸アシスタント)
矢加部 咲
Saki Yakabe (熊本市現代美術館学芸アシスタント)
大岩みゆき
Miyuki Oiwa (熊本市現代美術館学芸アシスタント)

藤本真帆
Maho Fujimoto (熊本市現代美術館学芸アシスタント)
高橋知江
Chie Takahashi (熊本市現代美術館学芸アシスタント)
岩崎千夏
Chika Iwasaki (熊本市現代美術館主査)

●発行元/ART KISS LETTER アート・キッス・レター Vol.39
2008年9月発行(秋号) ◎無料◎
●発行人/桜井 武 編集長/富澤 治子 担当/大岩みゆき
●デザイン/(有)松永 社デザイン事務所 ●印刷/コロニー印刷
●発行/熊本市現代美術館 〒860-0845 熊本市上通2-3
TEL.096-278-7500 FAX.096-359-7892